

4.1 鹿島川流域の災害伝承

鹿島川は、五龍岳（2814m）から流出する大沢川を主流に、鹿島槍ヶ岳（2889m）、爺ヶ岳（2670m）から流出する^{おおつめたざわ こつめたざわ おおかわざわ}大冷沢、小冷沢、大川沢等を合流し、山間部に谷底平野を作りながら流下し、下流には鹿島川扇状地を形成しています。扇状地の中程には、葛温泉から引湯して大町温泉郷が栄え、更に下流の大町市街地の西部で高瀬川に合流しています（図4.2）。

鹿島川流域には、古くから地震、降雨、融雪などを誘因とした災害伝承が多く残されています。

そして、繰り返される災害に苦しめられてきたこの地域の人々は、常陸国（現在の茨城県）の鹿島神宮（鹿島神社の総本社）より、災害鎮圧の神様である鹿島神を勧請（神様の分身を祀る）しました。それが、現在の鹿島集落に鎮座する鹿嶋神社（写真4.1）であると伝えられています。総本社の鹿島神宮には地震や災害を抑えることで有名な「^{かなめいし}要石」（写真4.2）が祭られています。そして、ここ鹿島川流域にも同じ目的の「要石」（写真4.3）が祭られているのです。



写真 4.1 鹿嶋神社，2024 年撮影



図 4.2 鹿島川流域概念図
(地理院地図「標準地図」「赤色立体地図」をもとに編集)



写真 4.2 茨城県 鹿島神宮の「要石」, 2024 年

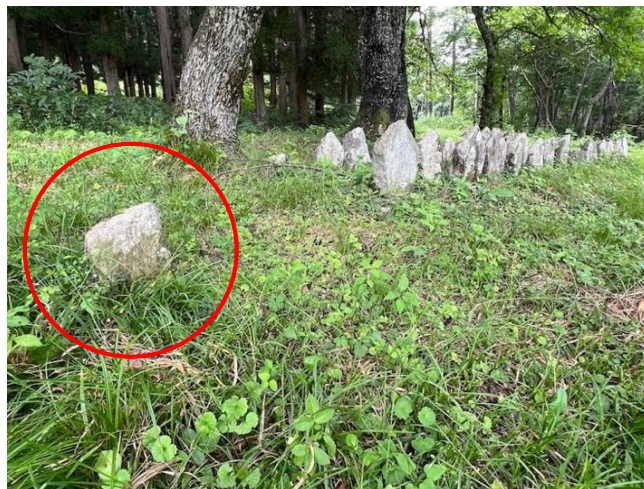


写真 4.3 鹿嶋地区の「要石」, 2024 年撮影



写真 4.4 鹿嶋神社「由緒」, 2024 年撮影

村社 鹿嶋神社

御祭神 武甕槌神（たけみかづちのかみ）
 雷神、刀剣の神、弓術の神、武神、軍神として
 信仰されており、鹿嶋神宮（茨城県鹿嶋市）の
 主神として祀られていることから鹿嶋神（かし
 まのかみ）とも呼ばれる。

鉾絵では、要石に住まう日本に地震を引き起こ
 す大蛇を御するはずの存在として多くの例で描
 かれている。

由緒

大同二年（八〇七年）「たいら川」の氾濫に里人
 が天地の保護神として常陸国鹿嶋神社に分霊を
 奉じて勧請し、あわせて丑寅に息柄神社、辰巳
 の方角に鹿嶋神社を祀った。鹿嶋神社の神徳が
 広大であったため、里人の集落を「鹿嶋」と改称
 し、「たいら川」を「鹿嶋川」、「鶴ヶ岳」を「鹿嶋
 ヶ岳」と改称した。

弘化四年（二八四七年）旧三月二十四日に大地
 震があり、各地で大災害があったが、当社社氏
 子には少しの災害もなく、平静であった。神徳
 の偉大なることを顕現され御加護を仰ぐんとす
 る人々が列し、一里余に亘り、参拝した。

大正七年一月の大町地震のときも平静であつ
 た。それにより、般の参拝も多く、現在に至る。

昭和十七年（九四二年）十二月村社に列せられる。

（大町市文化財センター）

◎ 鶴ヶ岳の崩壊と冷沢の天然ダム

大同元年（806）に大地震があり、鹿島川流域では、多くの人家が倒れ、山崩れが発生したという伝承があります。

この時、鹿島の西にある鶴ヶ岡（鶴ヶ岳のことと考えられます）の山が崩れ、冷沢を堰き止めて湖水（天然ダム）となりました。人々は、この天然ダムの決壊を恐れ、地震の神様である鹿嶋様を祀りました（長野県北安曇教育会、1979）。

また、鹿嶋神社の「由緒」（写真 4.4）には、「大同二年（807）「たいら川」の氾濫に里人が天地の保護神として常陸国鹿嶋神社に分霊を奉じてあわせて丑寅（北東）の方角に息柄神社、辰巳（南東）

の方角に鹿嶋神社を祀りました。そして、鹿嶋神社の神徳が広大であったことから、集落を「鹿島」と改称し、「たいら川」を「鹿嶋川」、「鶴ヶ岳」を「鹿嶋ヶ岳」と改称した」とあります。

この他にも、永享十二年（1440）には、矢澤山が崩壊して鹿島川を堰き止めてしまった災害（4.2 項で詳しく説明しています）や、天文三年（1534）の地震でも大きな山崩れが発生し、鹿島川を堰き止めてしまったという伝承も残されています。



写真 4.5 鶴ヶ岳（鹿島槍ヶ岳），松本砂防事務所 2016 年撮影



図 4.3 鶴ヶ岳（鹿島槍ヶ岳）、大冷沢・小冷沢・大川沢の位置図
（地理院地図「標準地図」に加筆）

◎ 鹿島川扇状地の洪水災害

鹿島川は、高瀬川最大の支流です。そして、猫鼻から下流には鹿島川扇状地を形成しています。そして、扇状地への出口に位置する猫鼻においては「越荒沢用水」を始めとして、下流の村々において大変重要な用水が分流されています。猫鼻は、急に川幅が狭くなった場所であることから、この地点から何度も氾濫し、洪水災害が繰り返されてきた地点でもありました。そのため、大町組きつての難所ともいわれてきました。

享保三年（1718）の洪水では、約10kmも下流にあった大町の塩蔵までもが浸水しました。この地点は、その後も大雨の度に何度も洪水氾濫が繰り返され、鹿島川流域の村々は川除普請（治水工事）に多くの労力を払ってきました。図4.4は、寛政元年（1789）後の川除普請の絵図で、大きな堤防を設けた工事や、越荒沢用水などの流れが克明に描かれています。そして、延べ14200人余を動員した工事の記録が残されています。



図4.4 鹿島川猫ヶ鼻川除御普請絵図（浅野貢一氏所蔵）へ加筆

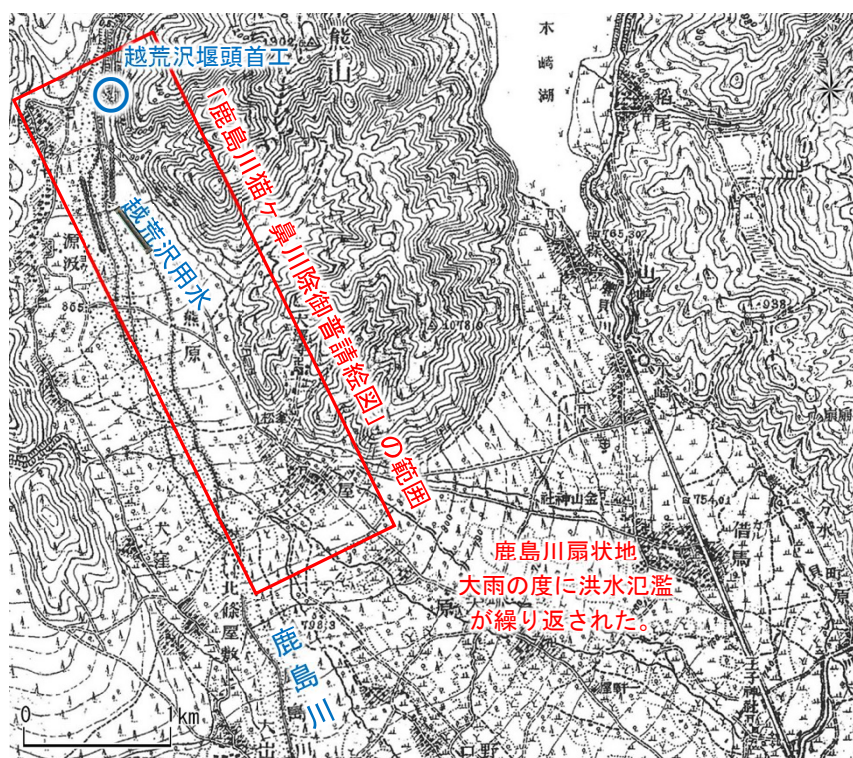


図4.5 猫鼻付近の旧版地形図、大正元年（1912）測図「大町」に加筆



写真4.6 用水取り入れ口付近、2024年撮影

◎ 「猫塚」の伝承

前項で説明した、鹿島川扇状地への出口に当たる猫鼻と呼ばれるところに「猫塚」と呼ばれる石碑（写真 4.7）があります。

この付近一帯は古くから水害が頻発した場所として有名です。大町市土地改良区の現地説明看板によりますと、「寛永十五年（1638）、雪解け水が溜まって付近一帯が大きな池になり、下流では大水害の心配をしましたが、ある山伏がお祈りをしたところ、少しずつ流れ出したので人々も安心した」といった伝承があります。

「猫塚」は、水害防止のため人柱の代わりに猫を埋めたという伝承もあったようですが、どうやらそうではなく、鹿島川左岸の崖となっている部分が猫の鼻のように見えることからつけられた地名「猫鼻」と、川除（治水工事）記念碑のような石碑であるようです。



写真 4.7 「猫塚」、2024 年撮影

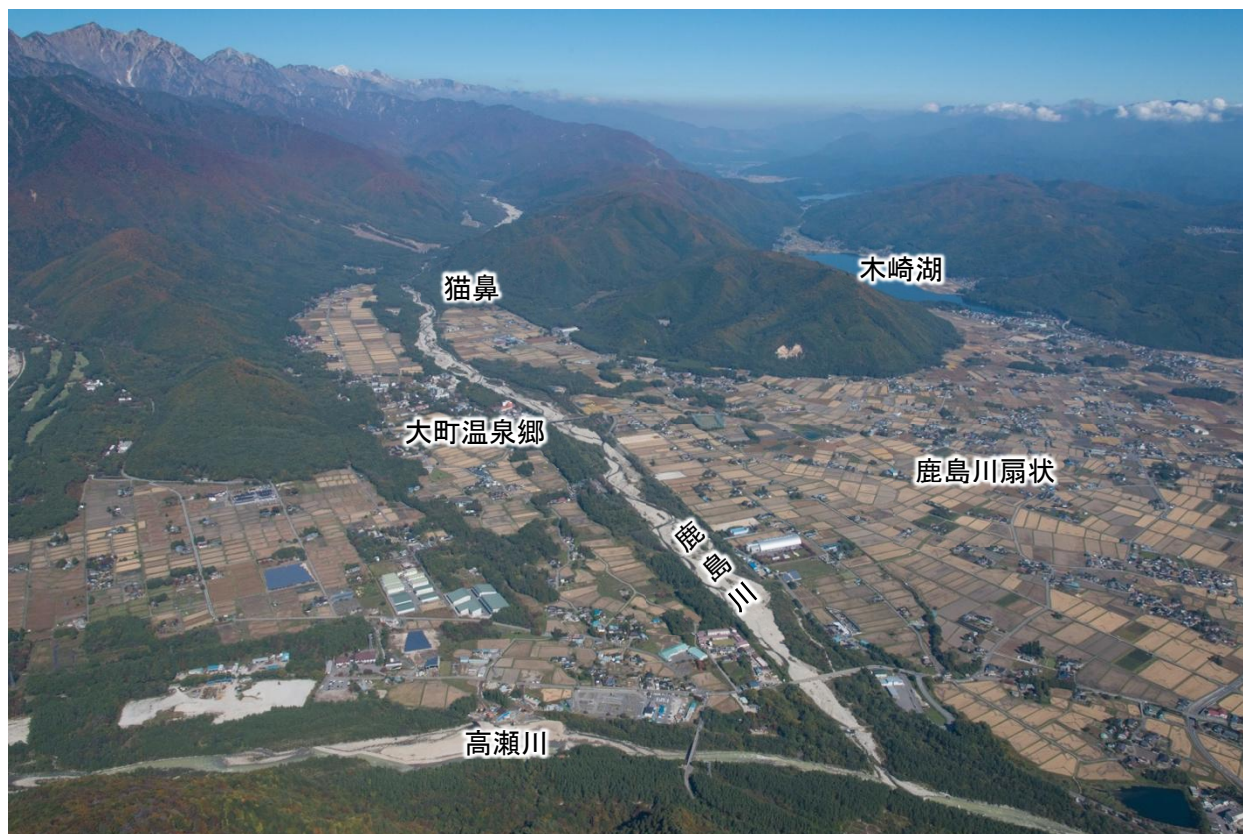


写真 4.8 猫鼻から下流の鹿島川扇状地
（松本砂防事務所，2015 年撮影）